特集にあたって

高　木　　裕

人文学部研究プロジェクト「〈声〉とテクスト論」では，学系附置コア・ステーション「〈声〉とテクスト論研究センター」と連携しながら，制度的な抑圧を受けてきた〈声〉を文学テクストのみならず，文化の様々なジャンルにおいてとらえ，そこから見えてくる問題を追究してきた。2012年９月に開催した国際シンポジウム「〈声〉と制度に関する比較総合的研究―継承・障害・侵犯」シンポジウムでは，ボルドー第３大学の研究部門代表であるマルティーヌ・ジョブ教授の基調講演があり，講演では，フランス語圏の作家たちが，とくに旧フランスの植民地において，フランス語という単一言語の制度のもとで，意識下に眠る現地語の〈声〉の響きを解放し，二言語の相克の中で，文学表現がその豊穣性をましてゆくという特徴が明確に示された。

2013年３月に，人文学部の主催で開催された，国際シンポジウム「〈声〉と制度に関する比較総合的研究―継承･障害･侵犯　PART 2」の第１部ではボルドー第３大学教授ブリジット・ルーイション Brigitte Louichon 教授による基調講演「フランス19世紀女性作家に強いられた沈黙」Le silence imposé aux femmes auteurs françaises du XIXe siècle があった。

ルーイション氏の基調講演は19世紀初頭の女性作家たちの〈声〉を差別し，抑圧する体制と制度に，ジェンダー論の視点から鋭く切り込み，文学史の裏面に光をあてる内容であった。大革命後の19世紀初頭の文学空間が，恋愛小説と教養小説は女性に，その他のテーマは男性作家に割り当てられ，今日では忘れ去られた女性小説家，コタン夫人，スーザ夫人の作品は，女性のみならず，多くの男性作家も引きつけていたと指摘した。この背景には，フランスにおいては roman「小説」というジャンルが18世紀を通して正当な評価を受けるどころ

か,「胡散臭い絵空事」で民衆を扇動するものとして，繰り返し出版禁止の対象となっていたことがある。ルーイション氏は,「恋愛と小説」の組み合わせこそが「女性による小説」という組み合わせを説明していたが，1820年代から，この構図は変化し，ジャーナリズムの興隆の中で，新聞小説の誕生とともに,「小説分野」への男性の進出が進み，そしてこの「男性化」の中で，文芸批評は，同時代の女性作家たちを酷評し，その〈声〉を消し去ったと指摘した。この考察を当時の具体的なデータに基づいて展開している。

ジェンダー genre（gender studies）の問題が，文学ジャンル genre が制度化してゆく歴史と深く結びつく過程を克明にとらえた講演であった。

この研究報告集（人文学部発行）は，平成25年11月に刊行された。

さて，今回の「人文科学研究」には,「声とテクスト論」プロジェクトから４編の論文が掲載されている。以下，概要を紹介する。

高橋早苗氏の論文「『源氏物語』夕顔巻の「家鳩」―〈回想〉の仕掛け― 」は,『源氏物語』夕顔巻の中で，光源氏の〈回想〉において初めて明らかにされた「家鳩」のエピソードの持つ意味を追究したもので，平安文学史において「家鳩」の登場はきわめて稀であったことを明らかにしたうえで，夕顔巻末における〈回想〉は，あがめ奉られる主人公・光源氏のもう一つの側面を浮かび上がらせるための仕掛けであった可能性を指摘した。

鈴木正美氏の論文「日本の具体詩のコンテクストにおけるフセヴォロド・ネクラーソフの詩の日本語訳について」は，現代ロシアの詩人フセヴォロド・ネクラーソフ（1934-2009）の作品を日本語に翻訳する際に生じる視覚と聴覚の問題について考察している。草野心平，春山行夫，北園克衛，藤富保男，新國誠一等とネクラーソフにおける声やオノマトペ，具体詩と視覚詩の探求を検証した後，山村暮鳥の「風景」とネクラーソフの３つの作品とを比較考察することで声と言葉が視覚イメージへと変わっていく過程を明らかにする試みである。

鈴木孝庸氏の「平家語りにおける終止感について ―平曲〈下り〉〈中音〉の墨譜の検討―」は，平家物語の区切り方に注目し，その区切り方は，ことば（説話内容，文章表現）と音楽（曲節）との対応を勘案して行われ，現存の平曲

譜本を見るかぎりでは，ほぼ固定しているが，平曲の曲節のうちの〈三重〉〈下り〉とその「ことば部分」とは，対応が比較的安定しているものの，終わり方について言えば，終止感にいささか足りないような墨譜を配分している例があると指摘する。鈴木氏は，そのような，曲節の終止部の墨譜の在り方を検討することで，〈語り〉の一単位の固定性の問題すなわち平家物語の区切り方が固定化していく傾向を確認し，さらに，固定化以前により自由な区切り方があったのかどうかという問題を考察した。

斎藤陽一氏の論文「スタニスラフスキーシステム再考」は，俳優の養成術として世界的に知られるスタニスラフスキー・システムは，どのように日本に伝えられ，発展してきたのか，その流れをロシアでのシステムのあり方と関連させてたどったもので，その中でも，築地小劇場時代の小山内の演劇観とまだ萌芽状態だったシステムの関係を探り，小山内が残した論文からは，スタニスラフスキーが得意とした演出方法を採用していたと推測されるが，むしろ，スタニスラフスキーの演出方法の小山内による活用は，モスクワ滞在中に実際に見た芝居を「模倣」することから始まったのだと指摘した。